

死が終わりではない

ヨハネの福音書 11 章 1-16 節

はじめに

今日から「ヨハネの福音書」の 11 章に入ります。11 章には、イエス様が「**ラザロ**」という人を死からよみがえらせるという奇跡が書かれています。ラザロは、「**ベタニア**」という村の人でした。「ベタニア」は、エルサレムに近く、3km 程しか離れていません（ヨハネ 11：18）。ラザロには、「**マルタ**」と「**マリア**」という姉妹がいました。ルカの福音書 10 章を見ると、この姉妹は、イエス様を自宅に招いて、もてなしたという出来事が書かれています（ルカ 10：38-42）。イエス様は、エルサレムに来られた時は、いつもこの姉妹の自宅に宿泊していたと考えられます（マタイ 21：17）。その意味で、イエス様とこの姉妹、そしてラザロは、とても親しい関係にあったのです。

余談ですが、このマルタとマリアとラザロの兄弟構成はどのようなものだったのでしょうか。聖書には、姉妹とか兄弟としか書かれていないので、マルタとマリアはどちらが姉でどちらが妹なのか、またラザロは兄なのか弟なのかが分かりません。伝説では、マルタ、マリア、ラザロの順番だったようです。マルタはお世話好きでしっかり者の長女で、マリアはマイペースでおっとり者の次女、そしてラザロは末っ子の甘えん坊という具合でしょうか。

彼らの両親はすでに亡くなっていたようで、この兄弟は、力を合わせて互いに支え合って生きてたのでしょう。その兄弟のひとりラザロが病気になる、死んでしまうというのが今日の聖書箇所です。

1. 姉妹たちの信仰

マルタとマリアは、ラザロが重い病気に罹っていることをイエス様に伝えます。しかしこの時、イエス様はベタニアから歩いて一日程の距離にある、「**ヨルダンの川向こう**」におられました（ヨハネ 10：40）。つい先日、エルサレムで石打ちにされそうになったので、そこに避難しておられたのです。

マルタとマリアは、イエス様の所に使いを送ってこう言います。「**主よ、ご覧ください。あなたが愛しておられる者が病気で**」。この言葉に、マルタとマリアの信仰を見ることができるといえるような気がします。一つは、彼女たちは、イエス様を「主」と呼んでいます。彼女たちは、イエス様を神の子また神様ご自身であると信じているのです。そしてもう一つは、彼女たちは「ラザロが病気で」とは言わずに、「あなたが愛しておられる者が病気で」と言います。彼女たちは、自分たちがイエス様に愛されているという確かな確信があった

のです。5 節にも、「イエスはマルタとその姉妹とラザロを愛しておられた」とありますし、11 節でイエス様は、ラザロのことを「わたしたちの友」と呼んでいます。彼女たちは、イエス様の愛を少しも疑うことなく、「あなたが愛しておられる者が病気です」と言うのです。

私が今回、彼女たちの信仰で最も教えられたことは、彼女たちはイエス様に、「すぐに来てください」とか「癒やしてください」とは言わずに、ただ「病気です」と伝えただけであるということです。彼女たちは、イエス様に何も願っていないのです。ただラザロが病気であることを伝えるだけなのです。私だったら、もし自分自身や家族がラザロのように重い病気で、今にも死にそうであるなら、「イエス様、癒やしてください、何とかしてください」と祈らずにはいられないと思います。しかし彼女たちは、何一つ願わず、ただ「あなたが愛しておられる者が病気です」と伝えるだけなのです。それは、彼女たちがラザロの病気の一切をイエス様に委ねているからだと思うのです。彼女たちには、イエス様に愛されているという確かな確信がありました。ですから、「私たちを愛しているイエス様なら、必ず最善のことをしてくださる」という全幅の信頼があったのではないのでしょうか。自分たちの願いよりも、イエス様の御心と御計画のほうがかきっと最善であると信頼していたからこそ、彼女たちは何も願わず、ただ「病気です」と伝えたのではないのでしょうか。彼女たちの信仰は、イエス様に愛されているという確かな確信とイエス様に対する全幅の信頼です。彼女たちは、この信仰を、愛する家族が今にも死にそうな重い病気に罹っているという極限の状態を抱いたのです。これこそ、イエス様に愛されている人の信仰なのだと思います。

2. イエスが愛された者の病気

では、イエス様は彼女たちの言葉を聞いて、何と言われるのでしょうか。4 節で、イエス様はこう言われます。「この病気は死で終わるものではなく、神の栄光のためのものです。それによって神の子が栄光を受けることになります」。

まず始めに確認しておくべきことは、ラザロが病気になったということは、イエス様に愛されている人も病気になるということです。イエス様を信じたから病気にならないとか、クリスチャンになったから病気にならないということはありません。イエス様を信じて、クリスチャンになっても、残念ながら重い病気に罹ることがあるのです。しかし、イエス様に愛されている人の病気には、他の人にはない特徴があるのだと思います。それは、「死で終わるものではない」ということです。この世の人々は、「死んだら終わりだ」と思っているかもしれませんが、しかし、イエス様に愛されている人の病気または死には、その先があるのです。そのことは後で触れたいと思います。

もう一つ、イエス様に愛されている人の病気の特徴は、「神の栄光のためのものである」ということです。またその病気によって、「神の子が栄光を受けることになる」ということです。イエス様は 9 章でも、生まれたときから目の見えない人について、こう言われました。「この人が罪を犯したのでもなく、両親でもありません。この人に神のわざが現れるため

です」(ヨハネ 9:3)。イエス様に愛されている人の病気には、目的があるのです。「神の栄光のため」「神のわざが現れるため」という目的があるのです。

この説教を準備する中で、自分の病気について振り返ってみました。私は小学校 3 年生の時に、「ペルテス氏病」という足の病気になりました。この病気は、股関節の骨が削れて歩けなくなる病気です。この病気の原因は、運動のやり過ぎのようです。私はその頃、野球チームに入っていました。野球が大好きで、レギュラーになりたくて、一生懸命、練習していました。チームの練習がない時でも、一人で素振りや壁当てをしていました。チームの練習や試合は土日にあったので、私はいつも日曜日に教会に行くのが嫌でした。よく両親に、教会を休みたいと訴えて、泣いていたのを覚えています。そんな時に、「ペルテス氏病」になったのです。そして、全身麻酔で手術を受け、3 カ月ほど親もとを離れて入院し、その後も、小学校 6 年生までの約 2～3 年間、松葉づえで生活しなければならなくなりました。当然、大好きだった野球も止め、レギュラーになる夢も絶たれました。しかし、私は今になって思うのです。あのまま野球を続けていたら、私の人生はきっと違うものになっていただろうと。野球にのめり込み、教会には行かなくなり、牧師にもなっていなかっただろうと。イエス様に愛されている人の病気には、神様の目的があるのだと思います。その時は分からなくても、必ず目的があるのだと思います。神様が無意味に、私たちに病気を与えることなどないのだと思います。

3. イエスが愛された者の死

イエス様は、彼女たちの言葉を聞いても、「**そのときいた場所に二日とどまられた**」と 6 節にあります。イエス様は、ラザロのもとにすぐには駆けつけなかったのです。そして、この二日の間に、ラザロは死んでしまうのです。彼女たちは、ラザロの病気をイエス様に委ねました。しかし、委ねた結果、ラザロは死んでしまったのです。イエス様は、ラザロの病気を、「死で終わるものではない」「神の栄光のためのもの」「神の子が栄光を受けるためのもの」だと言われました。では、「神の栄光」「神の子の栄光」とは、具体的に何なのでしょう。

「ヨハネの福音書」において、「神の子の栄光」とは、イエス様の十字架と復活を意味します。イエス様は、ご自身が十字架への道を歩み始める時、「**人の子が栄光を受ける時が来ました**」(ヨハネ 12:23)と言われました。イエス様が十字架で死なれ、死から復活される時、神様の栄光が現われ、イエス様が栄光を受けるのです。では、イエス様の十字架と復活と、ラザロの死はどんな関係にあるのでしょうか。ラザロはこの後、イエス様によって死から復活させられます。実は、ラザロの死と復活は、イエス様の十字架と復活を指し示すものであったのです。イエス様は、15 節でこう言われます。「**あなたがたのため、あなたがたが信じるためには、わたしがその場に居合わせなかったことを喜んでいます。さあ、彼のところへ行きましょう**」。ラザロの死と復活は、弟子たちがイエス様の十字架と復活を信じるためのものだったのです。つまり、イエス様が十字架で死なれた時、ラザロが復活したよう

に、イエス様も必ず復活すると弟子たちが信じるためのものであったのです。その意味で、ラザロの病気だけでなく、ラザロの死にも神様の目的がありました。イエス様に愛された人は、その死にも意味と目的が与えられているのです。イエス様に愛された人が、無意味に死ぬことなどないのです。

イエス様は、ラザロが死んだ時、11節でこう言われました。「**わたしたちの友ラザロは眠ってしまいました。わたしは彼を起こしに行きます**」。イエス様は、ラザロの「死」を、「眠り」と表現しました。聖書は一貫して、イエス様を信じるクリスチャンの「死」を、「眠り」と表現します。世の中でも、よく亡くなった人のことを「永眠」と表現します。つまり、「永遠に眠る」ということです。しかし、聖書は「永遠に眠る」という意味で、クリスチャンの「死」を「眠り」と表現しているわけではありません。「やがて起きる」「やがて目を覚ます」という意味で、「眠り」と表現しているのです。イエス様を信じるクリスチャンは、ラザロが死から復活したように、またイエス様が死から復活したように、たとえ死んだとしても、イエス様がこの世にもう一度来られる最後の審判の時に、死から復活するのです。イエス様に似た栄光のからだを与えられて復活し、新しい天と新しい地で永遠に生きるのです。その意味で、イエス様を信じるクリスチャンの「死」は、「眠り」に過ぎないのです。ラザロの死と復活は、イエス様の十字架と復活を指し示すだけでなく、私たちの死と復活を指し示すためのものでもあるのです。私たちが、私たちの復活を信じるためのものでもあるのです。イエス様に愛されている人の「死」は、「眠り」に過ぎません。やがて必ず「起きる」「目を覚ます」からです。その意味で、イエス様に愛されている人にとって、「死は終わりではない」のです。

おわりに

最後に、9-10節で語られたイエス様の言葉に目を留めて終わりたいと思います。「**昼間は十二時間あるではありませんか。だれでも昼間歩けば、つまづくことはありません。この世の光を見ているからです。しかし、夜歩けばつまずきます。その人のうちに光がないからです**」。イエス様は、「**わたしは世の光です**」(ヨハネ 8:12、9:5)と言われました。イエス様と共に歩めば、私たちはつまづくことはありません。しかしイエス様と共に歩まなければ、私たちはつまずいてしまいます。私たち自身は、光を持っていないからです。私たちは、自分自身や自分の家族が思わぬ病気になる時、あるいは死を迎える時、目の前が真っ暗になるような感覚に襲われるかもしれません。しかし、イエス様が私たちと共に歩んでくださるならば、そのような病気や死の中でも、希望の光を持つことができるのだと思います。イエス様に愛されている人の病気や死には、必ず意味と目的があるからです。またイエス様に愛されている人にとって、「死は終わりではない」からです。

天におられる私たちの父なる神様。

病気や死は、私たちの人生に暗い影を落とします。しかしイエス様は、病気や死に希望

の光を与えてくださる方です。私たちがマルタとマリアのように、イエス様に愛されていることを確信することができますように。その愛の中に、自分や家族の病気や死を委ねていくことができますように。

この祈りを私たちの救い主イエス・キリストの御名によってお祈りします。アーメン。